

「おんな城主・直虎」はいなかった

2020 年 11 月 24 日

我部山 民樹

1. まえがき

大河ドラマの「おんな城主直虎」が放映される直前に、井伊美術館の館長（現当主）の「井伊達也」氏が、『「井伊直虎」は「次郎法師」ではなく別人の男性で、今川氏から井伊谷に送り込まれた今川氏家臣・「関口氏経」の息子・「井伊次郎」であると書かれた資料が見つかった』と発表して話題になった。「次郎法師」の母・「祐椿尼」と「井伊次郎」の叔父・「新野親矩」が兄妹であり、「次郎法師」と「井伊次郎」は従兄弟にあたる。おんな地頭「次郎法師」であった。

その後も著名な歴史家の間でも同一人物かどうかで意見が分かれているようだ。書状に残されている名前は「次郎法師」と「次郎直虎」だけである。

歴史家の中には「次郎」は井伊家総領の名前で、同時に「次郎」と名乗る人物が二人いたとは考えにくいので同一人物だろう。また、別人と断定する資料も見つかっていない。そして、江戸時代の資料「雑秘説写記」に出てきた「井伊次郎」はのちの江戸時代に書かれているので信頼し難い' としている方もいる。しかし、'突然に出てきた「次郎直虎」は滅亡寸前の今川氏が井伊谷（いいのや）に当主として「井伊次郎」を送り込んだ' と推測する歴史家もいる。「次郎直虎」の名が残っているのは徳政令の書状の 1 度だけである。

これ以外に後世の資料には「次郎法師直虎」とか「井伊直虎」という名が多いが、同一人物であるとの前提（思い込み）でつけた呼び方だろう。ましてや「おんな城主直虎」というのは小説でつけられた呼び方に過ぎない。「おんな地頭」で実質的に当主であったと判断できる資料はある。「おんな地頭・次郎法師」だったのだ。

2. 主な出来事

1526 年（説）	井伊家第 18 代当主（遠江井伊谷城主）・直盛、誕生
1536 年	直盛の叔父の井伊直満の子・直親誕生
1536 年前後？	次郎法師、井伊直盛の娘として誕生 母親・祐椿尼は今川氏の家臣の新野親矩の妹
1544 年	井伊家小野家老・小野政直が今川義元に「直満・直義兄弟に逆位あり」と讒言。直満・直義が今川義元に誅殺される。誅殺対象になる直親は井伊谷（いいのや）を出奔し、武田領、松源寺に落ち延びる。 この頃、次郎法師、龍潭寺に出家する。
1555 年	直親復帰し、直盛の養子となる

1560 年	直盛が桶狭間の戦いで戦死したため、直親が第 19 代井伊家当主として家督を継ぐ
1560 年	直親の子・虎松（のちの井伊直政）誕生
1563 年	直親、井伊家家老・小野政次（道好）の讒言により謀反の疑いを受けて今川氏真に殺される
1565 年	（次郎法師）が還俗し、井伊家の地頭（領主）となる。
1566 年	次郎法師、龍潭寺へ寄進状（寺領安堵）を発給。 「次郎法師」の署名と黒印がある。注 1. 寄進状
1567 年	今川氏真、井伊谷一帯の農民の訴えにより、徳政令を出す。次郎法師が反対し、2 年間実施されなかった。 注 2. 徳政令
1568 年 9 月	この時点で今川氏が次郎法師を当主として認めていた（磯田氏）
1568 年？月	伊井家の家老・「小野政次」に井伊谷城を奪われる。
1568 年？月	今川氏家臣の「関口氏経」の若い息子が「井伊次郎」として井伊谷城に送り込まれる。（守安公書記）
1568 年 11 月	「次郎直虎」と今川家の家臣「関口氏経」が連署した徳政令を蜂前（はちさき）神社に発動し、神社に土地の一部を寄進している。注 3. 徳政令の発動
1569 年 5 月	「今川氏」滅亡
1569 年 12 月	「徳川家康」の支援を受けて城を取り戻す。 「関口氏経」の息子・「井伊次郎」が、家康により井伊谷を追われる。（磯田氏推測）
1570 年	「次郎法師」が家康に嘆願し、「小野政次」は横領と讒言を咎められ家康に処刑される
1572 年	「次郎法師」と「虎松」、「武田信玄」により城を追われる。家康の三河に逃れ、鳳来寺にかくまわれる。
1573 年	信玄の死により武田勢が撤退する。「次郎法師」、徳川家康の支援で城を取り戻す。
1575 年	「次郎法師」等が「虎松」を家康に仕えさせる。「虎松」は家康から井伊谷の領有を認められて、家康の小姓に取り立てられる。名を「井伊万千代」と改める。（のちに「井伊直政」と改める。）
1582 年 3 月	武田氏滅ぶ
1582 年 6 月 21 日	本能寺の変

1582 年 9 月	「次郎法師」、死去。晩年、龍潭寺の松岳院で過ごしたとも、自耕院（のち、妙雲寺に改名）で過ごしたとも伝えられている。
1735 年	「井伊次郎」に関する記述のある「守安公書記」の清書版が成る。この中に「雑秘説写記」が収められていて「井伊次郎」が井伊谷に当主として送り込まれたとの記述がある。 木俣守安公；1585～1673 年

注 1. 寄進状（黒印状）

・1566 年 9 月 15 日、「次郎法師」は伊井家菩提寺・龍潭寺の何溪和尚に宛てに「龍潭寺寄進状」を発給した。「次郎法師」の署名と城主を示す黒印が押しである。虎松 5 歳の時、井伊家の子孫繁栄を祈願して寄進した文書

注 2. 徳政令を拒否した理由（説）

・徳政令は元々借金返済で困った農民が「今川氏真」に徳政令の発布を訴えた。1567 年、ついに氏真は「井伊谷徳政」を発布。しかし、「次郎法師」は 2 年間拒否し続けた。その理由は

- ・井伊家の経済を支えてきた（借金）「瀬戸方久」を守らなければ、井伊家が没落してしまうので、徳政令を拒否し続けたとの説もある。
- ・龍潭寺が困窮するのを防ぐ。
- ・蜂前神社の「祝田禰宜（ほうだねぎ）」と伊井家家老の「小野政次」が手を組み、井伊家と「瀬戸方久」を追い落とすために、今川家に徳政令の訴えを起こさせた。それに次郎法師が対抗した。

注 3. 徳政令発動の文書（説）

・1569 年、家臣・「関口氏経」を井伊谷に差し向け、徳政令を実施するという文書に「次郎法師」に署名させた。文書には「次郎直虎」の署名と花押が押されている。貴重な文書として蜂前神社に保管されている。

後世、次郎は伊井家総領のことであり、次郎は一人しかいないとの理由で、（「次郎直虎」と「次郎法師」は同一人物とされ、この文書に「井伊直虎」の署名があるとか「次郎法師直虎」の署名があるとされている。また、女の花押は珍しいとされ、貴重だともいわれている。）

3. 系譜

○伊井家

井伊家第 16 代直平→17 代直宗→18 代直盛→女地頭・次郎法師



- ・直満→第19代直親→第20代直政
- ・南溪和尚（龍潭寺住職）（他省略）

○関口家（次郎法師の母親・祐椿尼の家系）、

→関口氏経→伊井次郎（直虎？）



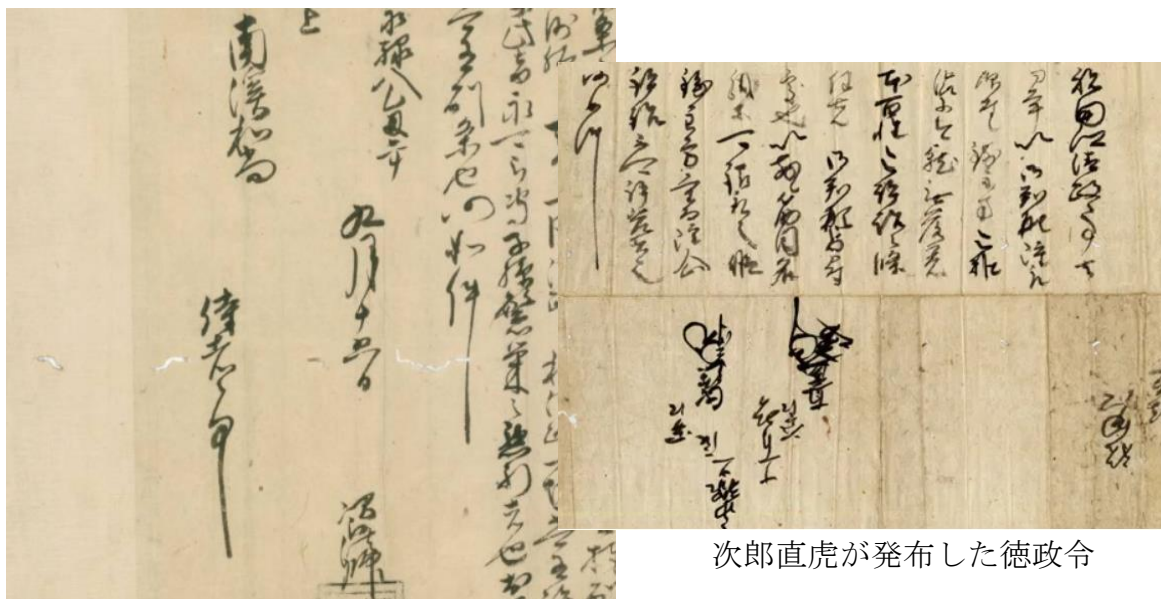
- ・新野親矩
- ・祐椿尼（ゆうちんに、伊井直盛の妻で次郎法師の母親）

4. 位置図



↓ 浜松城

5. 印判状（寄進状）と徳政令発動の文書



次郎直虎が發布した徳政令

次郎法師が発給した印判状

6. 「次郎直虎」は誰？

(1) 前提条件を整理する

① 次郎法師は男か女か？→おんなである。

・「次郎直虎」と男の名前を名乗って書状に花押を押している。男にしかできない花押を使っているのは「次郎法師」が実は男だったとする説である。確かに男に限られていたので、男が書いたと解釈すべきである。

・男が出家した場合は還俗できない。しかし尼は還俗できる社会だったので、「次郎法師」という名前を親族の南溪和尚が世継ぎを心配して名付けたという話は信頼できる。実際、還俗しているので、「次郎法師」は女である。

② 「おんな地頭」は存在したのか？→存在した。

この時代、守護が国を統治し、在地の御家人から選ばれた地頭が軍事、警察、超税件を担保し、土地や百姓を自己のものにしていた。後継ぎの男子がない場合、娘が跡継ぎになることは認められた。「おんな地頭」と呼ばれることはあった。井伊家伝記には「次郎法師はおんなながらに伊井家総領になった」とある。

③ 「おんな城主直虎」の呼び方は？→後世の小説等での呼び方

④ 「次郎法師直虎」の呼び方は？→、当時の文書には無い。後世の呼び方である。

⑤ 「井伊直虎」の呼び方は？→後世の呼び方である。

⑥ 「井伊次郎」は伊井家の家老・木俣守安の「守安公書記」に何度も出てくる。

今川氏家臣・関口氏経の息子で、井伊谷城に送り込まれたとしている。信頼度は？→高い

(2) 検討条件をまとめる

・「次郎直虎」の名前が書状に出てくるのは徳政令の一回だけである。しかも今川氏末期の1582年になって、突然に出てくる。ただし、「次郎法師直虎」とは書いていない

・新田郷の有力者（蜂前神社）宛ての書状で徳政を発動しているが、「関口氏経」と「次郎直虎」の連署になっている。その関係は？

今川家代表の氏経と井伊家代表の「次郎直虎」か、それとも若い「井伊次郎」の威厳を考慮した上での親子の連署なのか？

・江戸期（1735年）に子孫が清書した彦根藩家筆頭家老・木俣守安（1673年没）の「守安公書記」によれば「新野親矩」の甥の「氏経」の息子が「伊井次

郎と名乗り、井伊谷城主として送り込まれた」とある。ただし、次郎直虎とは書かれていない。

のちに書かれたもので、あいまいな面もあり、全幅の信頼は置けないとの意見もあるが、何度も出てくるので、信頼できる。記憶違いで何度も出てくるとは思われなし、嘘を書く理由は見当たらない。

- 江戸時代に書かれた伊井氏の家伝「伊井家伝記」には「次郎法師は女性ながら、伊井家総領になった」と記されている。寄進状や徳政令を拒否しているので、当主であろう。しかし「直虎」の名は出て来ない。別人だからだろう。

「井伊家伝記」ものちに書かれたもので、あいまいな面もあり、また栄達を遂げた子孫が名誉を守るために隠すとか、過大に表現しがちである。今川氏にながしろにされていたとは思いたくないし、知られたくもない。例えば、一時期とは言え、今川氏に地頭の立場を剥奪されていたとしたら、それは隠すかも知れない。

- 龍潭寺には次郎法師の名前で発給した黒印を押印した印判状(印章を押した文書)が遺されている。地頭として発給し、次郎法師はおんなだから、花押を使わず、黒印を使用したのは当然のように思われる。赤松洞松院、今川寿桂尼も当主の立場であったが、黒印状を発給しているが、花押を押印した資料は残されていない。
- 次郎の名は伊井家総領を表す名である。同時期に次郎が二人存在したとは考えにくいので次郎直虎は次郎法師と同一人物とする説がある。しかし井伊次郎を城主として送り込んだ時点で、同時に次郎法師から地頭の地位を剥奪しているだろうから、その時期は次郎が一人だったことになる。公にする時間もないままに徳政令を発令した可能性が高い。今川氏は滅亡寸前であり、非常識なことをやっても何ら不思議ではない。
- 花押を押すのは男だけである。おんなの次郎法師が花押を押したのだろうか？
- 直虎の名前は徳政令の一回限りである。何故、急に出てきたのか？
- 2年間も徳政令を拒み続けていた次郎法師が何故受け入れたのか？
- 守安公書記に全幅の信頼を置けないとしても、わざわざ嘘を書く理由が見当たらない。しかも井伊次郎の名は何度も出てくる。
- 井伊家伝記に「次郎法師はおんなながら、井伊家の総領であった」としているが、これは当主で、地頭の立場ということだろう。黒印状を発給しているし、事実だから書いたのだろう。この時代、地頭に男子後継者がいない場合、娘を後継者にすることを認めていて「女地頭」と呼ばれた。
井伊家歴代(当主と御台所)の墓に「次郎法師」も並んでいるので、当主の扱いであろう。

- ・井伊家伝記に直虎の名は出て来ない。当然、徳政令の書状の存在は知っていたのだろう。「次郎法師」が「直虎」と名乗って、花押も押しているなら、「直虎」と改名し、城主の立場にあった」と書くはずである。隠すような理由は見当たらない。
- ・直親と次郎法師が許嫁であったという話は「井伊家伝記」にしか出て来ない。直親と次郎法師の墓だけを並べた写真が多い。いかにも許嫁だったことを連想しそうだが、実はそうではない。直親の墓は妻のひよと並んでいるのだ。墓は父親の当主・直盛が正面（写真に左側）、右奥が母親の祐椿尼、その左隣りが子の次郎法師、次が次期当主・直親、左隣に妻の‘ひよ’、子の直政の並びであり、世代順に並んでいる。



(2) 推論

資料の信頼度も検討を要すると思うが、資料が正しいとして、素直に解釈すれば、次のようになる。

- ・次郎法師は「おんな地頭」であり、領主の座にあった。
- ・花押を押した「直虎」は男だった。従って「次郎法師」ではなかった。
同一人物に拘るあまりに、花押を押すのは男だけだったので、次郎法師は実は男だったという説があるが、逆である。男が押印したのであり、「次郎法師」とは別人なのだ。
- ・「次郎法師」は井伊家を守るために 2 年間も徳政令の実施に同意しなかった。井伊家を守るために死んでも応じない覚悟だったと思われ、今川家家臣の「関口氏経」の徳政令に関する説得に応じなかった。そこで、今川方は強行的な手段に訴えることにした。しかし「次郎法師」の命を奪うような手段を選ぶのには抵抗があったので、井伊家家老・「小野政次」に奪い取らせる。

- ・傀儡の城主を送り込む。「次郎法師」から領主の立場を剥奪し、「関口氏経」の若い息子を城主とし、「井伊次郎」と名乗らせる。次郎法師の母方の従兄弟で縁者だ。滅亡寸前の今川氏は何をしてもおかしくない状態だったのだろう。
- ・徳政令の発布に急拵えの「井伊次郎」の名では周知されない。衆知させる時間も無いので、「井伊次郎」を「次郎直虎」の名にすれば、勝手に「次郎法師」と混同してくれることが期待できる。後世の我々が混同しているくらいだ。そして今川家の強い意志を示すために今川家家臣・「関口氏経」も連署する。うがち過ぎで、今後「直虎」を名乗るつもりだったが、間もなく今川氏が滅亡して井伊谷から追い出されたので、使うチャンスが無かったのかも知れない。

女の次郎法師が花押を押したのでもないし、ましてや実は男だったので花押を押印したというのでもない。花押は別人の男性が押印したのだ。

- ・翌年 12 月には守護大名としての今川氏が終焉し、残ったのは井伊家だけであり、その他の家系は没落したので、このことが語り継がれることは無かった。そこで井伊家の資料に頼るしかないが、「直虎」の名は残されていない。使わなかったからであろう。

「おんな城主直虎」ではなく、「おんな地頭（領主）次郎法師」だったのだ。



蜂前神社

以上